

《生産者紹介》

[川合農園]

〒060-0907 北海道夕張郡栗山町三日月 97

代表者 川合孝俊

○後継者を得て～玉ネギ専門の家族経営

北海道を代表する農産物の一つ、玉ネギの専門農家、夕張郡栗山町の川合農園・川合孝俊さんの有機玉ネギ作りは、農業の新らしい可能性を感じさせる、北海道ならではのダイナミズムに満ちています。

川合さんが有機栽培と取り組み始めたのは有機 JAS 制度がスタートした翌年 2001 年でした。現在の玉ネギの生産面積は、有機が約 2ha、特裁が 10.5ha で合計 12.5ha（他に 1.5ha で緑肥を栽培）。その営農を支えるのは孝俊さん（61 歳）・妻政子さん（59 歳）夫婦と 8 年前にサラリーマンを止めて後継者になってくれた次男裕二さん（30 歳）の 3 人が中心です。

その栽培規模は、栗山町の約 80 軒の玉ネギ農家の中でトップクラスですが、その品質や味こそ「誰にも負けない」自信があると川合さんは言います。その通りに川合さんの玉ネギの評判は高く、有機農産物の仲買業者からの引き合いが絶えないそうです。

ここに至る川合さんの有機に賭けた歩みは苦あり楽あり、生々しくドラマティックです。

初夏のいま、北海道の玉ネギ生産は植えつけの最盛期を迎えているかと思えます。川合さんの作業ぶりと年間の作業暦を、有機栽培の粒粒辛苦の歩みとともに見ていくことにします。

○丹精の苗作り～移植機の圧倒的な機械力

川合さん流の玉ネギの栽培方法と栽培暦はこうです——。1 年のスタートは、50cm 以上雪の残る 2 月 20 日ごろ、ハウスの中での種蒔きからです。苗箱（30cm×60cm 大、448 穴のポット）

の培養土に種を 1 穴に 1 粒ずつ蒔きます。12.5ha 全部で苗箱が約 8900 個、トータルざっと 400 万本超の苗を作るわけです。

種を蒔いたら、苗箱をビニールマルチで覆い、その苗箱を並べた上部にビニールのトンネルをかけます。ハウスのビニールを含めると、苗箱には 3 重に保温装置が施されることとなります。太陽光＝自然に頼るのです。

そして毎日、苗箱のマルチをめくり種に水をかけ発芽を促します。2 週間弱で 5mm～1cm に芽が伸びたらマルチを剥ぎます。その後も散水を忘れず、ハウスのビニールを開け内部の温度調節をしつつ育苗します。種蒔きから約 60 日後、4 月 20 日ごろ苗は 15cm～20cm に育ちます。注意深く優しく見守る毎日です。

次は圃場への苗の移植。トラクターで圃場を荒起こしし、肥料を撒いた後、トラクターで土を均し圃場の準備完了です。そこで移植機の出番。苗箱を一杯に積み込んだ移植機は圃場に 4 条の溝を切り、苗箱から苗を 1 本ずつ外しながら溝に植え込み、根元に土をかけて終わり。機械は 1 日 2ha の作業をします。

労働力 3 人のうち 1 人が機械の操作、他の 2 人がトラックへの苗箱の積み込みと、圃場への搬入をするアウンの分業態勢です。

移植作業は天気の日に限ります。雨だと土がベタベタになり（川合さんの圃場は粘土質）、移植機が機能しないからです。4 月の不安定な天候を見極めないといけません。

圃場では苗が活着するにつれ雑草もぐんぐん伸び、5 月から 7 月まで除草の急場を迎えます。除草は 4 条の畝間の除草専用機を走らせるのが基本。それで足りない分を有機の 2ha につき株間を重点に、3 人のパートさんに除草してもらいます。畝間（27cm）は機械がやりますが、株間（11.3cm）は機械がやれないからです。移植機を調節してセットするこの畝間と株間の間隔は、試行錯誤の末に川合さんがたどり着いたベストな数字だと言います。ベストの中味は後述します。

○機械と人の工夫が融合～精妙な農業の技

8月盆前ぐらいから収穫時期を迎えます。玉ネギが植わったまま根を切り、成長を止める根切り作業をカッター器具を装着したトラクターで行います。

1週間後、ハーベスターを走らせ畝の上に玉ネギを掘り上げていきます。真夏の日光で玉ネギがぐんぐん乾きますが、注意すべきは、気温が35度C(地上は40度C)にもなると日焼けし不良品になるので、掘り上げは、真夏日にならない日を見通して選ばないといけません。万事、天候の見極めが一番のポイントです。

乾いた玉ネギは大きな網状の鉄製コンテナ(1.3トン)に積み込み、その日のうちにトラックで自宅の庭先に運び、雨よけのブルーシートをかけ保管します。ここまでの収穫作業は、1日で0.5~1ha分をやれ、9月10日ごろ終了します。収量は平均して10a当たり有機が4~4.5トン(特裁がやや多目)です。

庭先で保管するのは1週間ばかりで、この「風乾」により玉ネギは良く乾き出荷可能となります。倉庫内で12月へかけ、さらに翌年初まで出荷作業をしつつ、圃場は収穫後、耕耘して緑肥の種を蒔き(積雪前に鋤み込み)、同時に礼肥をやりませす。

ここで肥料について見ておきましょう。仕入れは長年付き合いしている札幌市の「北進農材株式会社」から。有機の2ha分は「もぐら堆肥」とグアノを混ぜて合計4トンを苗移植前の圃場に撒きます。

他に土壌改良のため、稲作農家からもらう稲藁とモミガラを玉ネギ収穫後に撒きます。特裁の圃場には一般的有機肥料と化成肥料を使っています。農薬も慣行栽培の半分以下(特に除草剤は1回のみ)の使用としています。

以上が川合さん流當農の概要です。多くの作業が機械力に支えられていることが分かりますが、「25年ばかり前に開発された苗箱を用いた移植機の登場が画期的だった」と川合さんはいいます。1日で2haも植えられるようになった

からで、それ以前の発達途上の機械植えの時代をさらに遡り、今から40年前はと言うと、完全手植えで、1人で1日2~3a程度でしかなかったそうです。

長時間の重労働だったことが想像に堅くありません。機械化は労働を軽減し大規模栽培を可能にした上、先に見たように、今の移植機の畝間や株間の間隔をミリメートル単位で調節できて、一石三鳥の効果なのです。

川合さん流の現在の株間11.3cmこそ、最上規格のLを作るのに最適な間隔だと言います。株間がそれより広いとLLになってしまうし、短いとSになってしまうからで、試行錯誤の末のその精妙さは、大規模な機械化農業といえども、それをハンドリングするのは人=農家の知恵であることを物語っています。



○連作障害～土壌診断～施肥の気付き

川合さんの有機の歴史を見てみましょう。慣行栽培から有機への転換は2001年でした。きっかけや動機は何だったのでしょうか?

当時、川合さんは父母とともに玉ネギと長ネギ、ハウレンソウを5haの畑で慣行栽培していました。しかし全体に連作障害が出始め、専門機関で土壌診断をすると、塩基の残留が特に長ネギを作っていたハウスの土壌で目立ち、それが災いしていることが分かりました。そこで水はけに注意し肥料の投入を抑えると(長ネギで

は無肥料)、だいぶ持ち直しました。まずまずの作柄が続き、ほっとしたのと同時に、施肥の大切さを思い知らされました。

2000年に有機JAS規格が制定されますが、その背景に化学肥料・農薬排除の有機農産物を望む消費者意識の高まりがありました。

連作障害に懲りていた川合さんは「食べ物の安全安心に対する消費者の思いが生産者としても理解できる。その流れに乗ってみようと思った」と言います。それまでも農薬はあまり使っていなかったため、有機栽培の道筋がぼんやりイメージできたものの、有機への転換は「正直イチかバチかだった」とも。当時44歳の川合さんの決断に「オヤジもやってみれ、と言ってくれた」のだそうです。

そこで川合さんの背中を押してくれたのが資材を仕入れていた「北進農材株式会社」（現在、後藤僚社長）の人達でした。取り扱っていた「もぐら堆肥」を推奨し、ほかに様々な有機の情報を教え、生産物の販売でも応援する、と言ってくれたそうです。

○収穫が不安定～諦めなかった農家魂

意を決し2001年、5haの圃場中の0.7haで有機に、1.7haで特裁に転換。そして05年に有機約2ha、特裁約3haへ進展しました。

有機に転換して何年間かは良く取れ、04年には10a当たり5トンを収穫しました。しかしその後、スリップスという虫に食害されるなどして同2.5トンとか3トン止まりという年もあり悔しい思いをしました。

ただ経営的には特裁の分がカバーしてくれ、消費者のために安全安心な野菜を作るという決意は揺るぎませんでした。最初何年かは良く取れたことを思い出し「ここで止めたらダメだ」と自らに言い聞かせてじっと耐えたのです。

そんなとき「株式会社マルタ」傘下の生産者、「岩見沢マルタ」の知人にも励まされ、販売支援もしてもらい「多くの人に助けられました」と川合さんは感謝します。天も味方したようで、

10年ほど経ったところからスリップスの発生も減り、地力アップもあってか玉ネギの出来は質量ともに良くなっていきました。玉ネギの芯が腐る「べと病」も発生を見逃さず素早く株を抜き取って対応すると、ほとんど発生しなくなりました。

こうして無農薬の栽培体系が徐々に出来上がっていったのです。

4、5年前に有機栽培技術がほぼ完成したのを実感したと川合さんは言います。先に見た通り、収量は10アール当たり4トン～4.5トン、玉は「L」や「L大」がほとんどで、文句なしだと言います。3年前に共に苦労してきた父を天国に見送りましたが、亡父の贈物だったようにこの数年の出来は特によく、15年は10a当たり5.7トンを越えていました。

○程良い辛み～そして甘いと人気上昇中

「10年辛抱せよ、と有機栽培で良く言われる言葉をいま実感している」と川合さんは言います。苦難の時代を含め、辛抱の裏にあった成功の原因は何かと聞くと「畑の地力がついたことに尽きる」と。つまり有機栽培で地力が付き、そこで育つ玉ネギが病気も虫害も寄せ付けなくなった！と言うのです。

有機への転換のメリットは、収穫の安定に留まらず、言うまでもなく味の向上にも結びついています。その味は「甘いのはもちろん、ほどよい辛みがあり、昔の玉ネギの味がすると言われる」と川合さん。

品物の出荷先は、「マルタ」経由が約40%、残りがさまざまな有機農産物の大手の仲買業者経由だそうです。味と品質の良さが評判を取り、新たな業者からの問合せが増え、川合さんは嬉しい悲鳴を上げています。

これに対応するため、今年から有機を2haから3haに増やすことにしています。

●川合さんの玉ネギの問合せは、北進農材株式会社へ：電話 011-741-1455

(宮崎隆典記)

